

## 被災地での支援活動を通じた学生間ネットワーク形成事業

### 団体名

国立大学法人岩手大学

### 震災後の地域の状況・仮設住宅数等

陸前高田市は、市街地が壊滅的な被害を受け、未だに高台整備や災害公営住宅の整備が進んでいない為、まだまだ仮設住宅での生活を強いられている住民が大勢いる。その中でも再建された方もおり、仮設住宅内では、今まで以上にコミュニティの維持が難しくなっている。

## ＜取組名＞ ～陸前高田市における支援活動と学生間交流～

### 取組概要

実施形態 (該当に○)	自治体単独実施	団体等との連携実施	大学との連携実施	(連携している団体等・大学の名称)
			○	東北大学・神戸大学
実施主体・ 場所等	コーディネーター数	ボランティア延べ人数	年間実施日数(回数)	活動場所
	14名	220名	6回	陸前高田市内仮設住宅・岩手大学

### 活動内容

※該当する内容に○

学校支援	学習支援	部活動指導	美化・環境整備	登下校指導	学校行事・その他
					( )
学校と地域の 協働学習	復興学習	防災教育	伝統文化・芸能	職業体験・キャリア教育	イベント・行事・その他
					( )
放課後等支援	学習支援	体験・交流活動	遊び・スポーツ	児童クラブとの連携	その他
					( )
家庭教育・ 保護者支援	家庭教育講座	親子参加行事	サロン・相談対応	家庭訪問相談	その他
					( )
地域課題に応じた 学習・交流	高齢者支援・世代間交流	心のケア・健康管理	生活再建・地域づくり	地域人材育成	その他
	○		○	○	( 学生間ネットワーク形成 )

### ＜取組の内容を具体的に記載＞

- 1、陸前高田スタートアップツアー…被災地の被害の現状ではなく、現在被災地で暮らす人たちは何を考え、何を思っているのかを中心としたツアーを実施した。
- 2、足湯ボランティア講習会…足湯ボランティアは、被災者との心の距離を縮めるにはとても有効な手段であり、そこで聴くことができる「つぶやき」には、とても重要なニーズが隠れている。その手法を今後学生たちが実践できるように、専門家による座学・実践指導を行った。また、被災者との接し方、関わり方についてのレクチャーも行った。
- 3、災害ボランティア講座…災害ボランティアについての基礎を学ぶため、阪神淡路大震災からボランティア活動を行っている有識者による講演を実施し、現在沿岸地域で実際にボランティア活動(NPO)を行っている方同士のパネルディスカッションを行った。
- 4、フィールドワーク(9月・11月)…陸前高田市内の仮設住宅に於いて、足湯や手芸などを用いたサロン活動を東北大学と神戸大学と実践した。仮設住宅でのサロン活動だけではなく、学生同士の良い交流の機会ともなった。
- 5、東北学生ボランティア交流会議同時開催第6回全国足湯交流会…被災した東北でボランティア活動を実践している学生たちのネットワーク形成やお互いの活動を知るための報告会などを実施した。また、フィールドワークで同じ活動を行った岩手大・東北大・神戸大の学生で学生企画を立て学生目線から見た課題などを出し合い、お互いでそれを解決できる糸口を探った。



取組の変遷

準備段階

◇被災による課題

陸前高田市は、市街地に甚大な被害を受けたため、そこで暮らしていた方が仮設住宅での生活を余儀なくされている。仮設住宅に入居する段階においても、これまでのコミュニティごとでの入居は行っておらず、皆ばらばらでの入居となった。そして、そのような状況でも仮設住宅に入居した方々は、そこで新たなコミュニティを形成することが出来た。しかし、時が経つにつれて、自力再建をしたり災害公営住宅への入居が進むことで、またしても、コミュニティの問題がでてきている。それは、新たに移った方もそうだが、仮設に残された方も同じである。

◇住民等からの要望・必要な取組

震災以後、様々なボランティアがこの地を訪れ、共に笑い、時には共に涙を流した。しかし、そのようなボランティアの姿は当然のように時間が経つにつれて少なくなっている。そこで、住民の方が望むことは、特別何かをしてほしい、施してほしいというわけではない。ただ、来てくれるだけでそれで良い。また、忘れないでいてくれればそれで良い。というものである。そのためには継続的な関わりが必要である。

体制づくり・取組の実施

◇協力を呼びかけた団体・関係者、役割分担

足湯ボランティア活動は、被災地に於いて住民の方との関係性の構築や、実施するに当たりスキルの有無に関して1回講習を行えば誰でも手軽に出来るという気軽さがある。その手法について学ばせて頂いた神戸市に本拠がある被災地 NGO 協働センターには、大きな役割を担って頂いた。そのおかげで参加した学生も被災地に赴くことで大きな学びを得ることが出来た。

また、フィールドワークに関しては、仮設住宅でのサロン活動を行う際に、学生自ら仮設住宅の自治会長に連絡を取り、活動が出来るまでやり取りをした。学生が自ら行うことで、用意された場にただ行くのではなく、自らが作り上げた活動が出来、そこでも大きな学びを得ることが出来たように実感している。

◇取組の充実や課題解決のための工夫

この事業を行う上で、最も工夫した点は、学生の主体性と学生同士のネットワークである。学生の手で一つ一つ組み上げることで、当事者意識を持ち、真摯に活動を行うことが出来た。その結果多くのものを吸収しようとする姿勢があり、同時に学生同士の仲間意識(ネットワーク形成)が行うことが出来た。

成果・課題や今後の展望

◇これまでの取組による成果

これまでも県外・県外の学生が被災地に入りボランティア活動を行ってきたが、今回、志を同じくする学生同士が集う場と機会を設けたことにより、横への展開がさらに広がった。

◇復興に資する内容としての数値的達成の状況

当初は、東北地域の大学を主に5大学程度の参加を想定していたが、結果として8大学が参加したことから、当初の数を上回って実施することができた。

◇課題や今後の展望

被災地の状況変化が続いており、深刻な明代も発生し、また、今後も発生が懸念されているが震災の風化も着実に進んでいる。このことから、コミュニティ再生に関心を持つ学生に広く呼びかけ、この志を次の代に継承させて行く大きな課題がある。また、大学の枠を超えた横への展開を図って行く必要がある。